

◇落合陽一からのステートメント

2ヶ月ほど朝も昼も夜も休みなくLLMs（大規模言語モデル）との対話を続けている。2023年は計算機自然（デジタルネイチャー）へ向かう上で重要な年として記憶されることになると思う。昨年の我々のコンサート、「ヒューマンコードアンサンブル」の際に我々は音楽と生成AIによる映像のコラボレーションを行った。コンサートホールで多くの聴衆とともに生成AIを用いたコンサートを行ったという意味で最初期の未来の古典的なものを行っていたと考えている。計算機自然に向かう上で、メディアアートが彫刻的所作から身体的・音楽的所作へと変化してきたことは環境の変化を大きく感じている。

我々はこのコンサートで「デジタル領域と古楽器との相互作用を探求し、記憶と過去という領域に踏み込んでいく。この探求の中心は、音楽と身体性の探求、映像的な言語と音楽的な言語の接続、LLMsとの対話を通じてシンボルやオブジェクトの認識を更新するアイデア、そして様々なシンボルやオブジェクトを楽器のようにリズムカルに接続することによって得られる、彫刻的な芸術であったメディアアートから、音楽的な芸術・身体的な芸術に近づくメディアアートへの内省と希望である。

人間とコンピュータと古楽器、一見すると人・モノ・デジタルの3領域にまたがるように見えるこのアンサンブルは、我々を取り囲む世界と楽譜やプログラム、シンボルやオブジェクトを通じて対話的に同調する能力の本質的な拡張を意味する。人の能力を計算機自然の中での調和した存在へと導く。このコンサートは、そういった探求から生まれた未知なるものへの考察であり、私たちの集団の歴史の奥底にある触覚的な・物質的な体験を呼び起こすものとして考えることができる。

阿頼耶識（Alaya-vijnana）とLLMの関係は、学習と回想の相互作用に例えることができる。我々が普段、世界を認識するために用いるすべての（デザイン言語・自然言語・身体言語的な）オブジェクトは空から生じて空に戻る。例えば、古代中国の荘子哲学とモルフォ蝶のモチーフからインスピレーションを得た映像表現は、東洋と西洋を超越して、物化と生成変化の概念を包含し、古楽器の音楽と調和している。コンサートを通じて質量性の高い古楽器から自由に生み出される古楽器の音楽、生成変化の自由度がより高まったデジタルの映像や言語や音楽、そしてそれを再び身体性に変換する所作を感じるができる。

古楽器・身体・メディアアート・クラシック音楽を融合させながら、デジタル領域の解像度やダイナミックレンジの中で欠落している要素を探し続ける追求は、ある意味でコンピュータサイエンスの背景を持つ者にとっては、ダダイズムやニヒリズムの一形態にも似ていることだろう。効率化の裏返しの中、私たちは質量と物理的な存在感を放つ作品に魂を惹かれる。この相反は多くの人に直感的に受け入れ難い事実である。効率的で機能的で計算量の多い機械知能は、我々の世界認識を常に更新し、アナログの感覚を研ぎ澄ますために最も重要な環境の一つである。そういった一瞬一瞬に生まれる未知の世界への旅路は人類の歴史から過去の具体的な経験と呼び起こし、蘇らせる行為でもあり、また仏教的な過去に遡れば、身体性の超越への追憶でもある。進化し続ける計算機自然という風景の中で、存在の美しさと複雑さを噛み締めることができれば、未来と過去は一つの円環となり、またそれも一つのオブジェクトとなるだろう。

この試みを通じて、人間と計算機自然の共生は非常に音楽的な、感覚的なものとしてあらゆる人々に直感的に馴染むものであることが体感できるなら幸いである。クラシック音楽、コンピュータサイエンス、芸術の要素の統合は多くの背景知識を包含するが、その体験それ自体は文脈依存ではない。音とイメージの作る芳醇な視聴覚体験は、身体性・質量・人間の本質的な欲求を呼び起こすことを目指している。この探究の中で、密教・空海・クラシック音楽・シンボリックコーディング・人間と計算機の協調・オブジェクト指向・長良川と鮎と鵜の見せる自然・松尾芭蕉など、多くの影響を取り入れた私たちのパフォーマンスが、皆様に新しい共感覚をもたらすことがあれば幸いである。